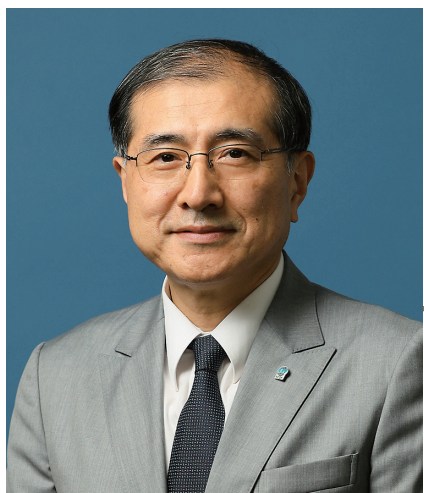




ACS Japan Chapter President/Governor ご挨拶

国立国際医療研究センター理事長
東京大学名誉教授

國 土 典 宏

Norihiro Kokudo, MD, PhD, FACS, FRCS

新型コロナウイルス流行の第8波がようやく落ち着き、3月から屋内でのマスク着用義務が緩和され、5月8日からは感染症法上の5類に移行することが決定しました。新型コロナ流行下の3年間、外科医療を守ってこられた会員の皆様におかれましては、一息つくと同時にポストコロナ、with コロナの時代へ向けて準備をされているものと存じます。

昨年2022年を振り返ってみますと、4月に熊本で開催された第122回日本外科学会学術集会期間中にACS日本支部年次総会をオンライン形式で開催し、54名の会員の皆様の参加をいただきました。またACS President Freischlag 先生からは“Enhanced Postoperative Recovery and the Value of Membership”と題するビデオ講演をお送りいただき皆様に視聴いただきました。

10月にサンディエゴで開催されたACS Clinical Congressは3年ぶりに対面開催となり、日本からも多くの会員に参加いただきました。対面開催への欲求は米国では日本以上に強く、ACS President Freischlag 先生の挨拶は対面で開催できることへの心からの喜びにあふれていました。恒例のJapan Chapter Receptionも3年ぶりに開催することができ、約50名の皆様に参加いただきました。日本からだけでなく米国へ留学中、あるいは米国で勤務されている日本人の外科医やその家族の方にも参加いただきました。また、バングラデシュ、カタール、ヨルダン、パナマ、アイダホ州、ニューヨーク州代表などのGovernorや鏡視下手術で著名なHoracio Asbun先生などの米国人会員も参加いただき賑やかなものとなりました（写真1）。協賛いただいたコヴィディエンジャパン株式会社にもこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

私自身はGovernorの一人としてInternational Relations Committee, Governors Chapter Activities International Workgroupのメンバーとなり2021年からオンライン会議に参加していましたがサンディエゴでは初めてface to faceで対話ができ大変有意義でした。ACSの国際戦略としてのInternational Chapterの拡大と活性化、低所得国へのoutreach、International

Fellowshipの推進等に協力しています。日本から今年のはがん研有明病院形成外科の矢野智之先生がInternational Guest Scholarship選出されました。

昨年日本からは23名のNew fellowsが誕生しました。新型コロナ禍や航空運賃高騰で国際学会に参加しづらい状況の中で応募いただいた先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ACS fellowの募集はこれまで年1回でしたが、昨年から年3回応募期間が設けられ、さらに応募しやすくなりました。先生方の教室、同門、職場の後輩の皆様に是非お声掛けください。

本年4月に東京で開催される第123回日本外科学会学術集会期間中（4月27日午前7時10分～）にACS日本支部年次総会を今年こそは対面でグランドプリンスホテル新高輪内において開催したいと思っています。詳細につきましては決まり次第ご連絡しますのでふるってご参加ください。今年はACS新PresidentのDr. E. Christopher Ellisonが来日し講演いただけることになっています。Dr. Ellisonはオハイオ州立大学外科のRobert M. Zollinger教授で、あのZollinger-Ellison症候群を見いだしたEdwin H. Ellisonのご子息です（写真2）。講演タイトルは“American College of Surgeons Initiatives to Promote Quality Surgical Care”です。

本年10月にはボストンでACS Clinical Congressが開催予定です。ボストンでお会いすることも楽しみにしております。



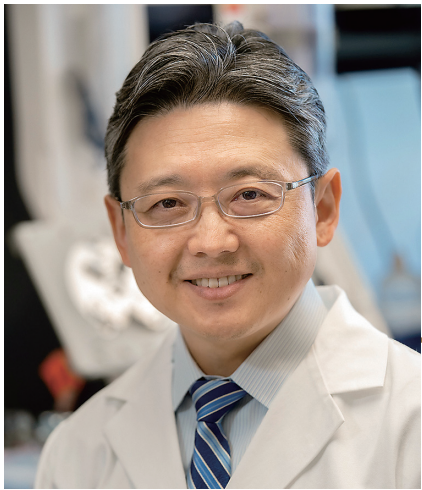
写真2：ACS新President E. Christopher Ellisonと
(2022年10月18日 サンディエゴ会場にて)



写真1：Japan Chapter Reception（2022年10月17日 サンディエゴにて）

略 歴

1981年	東京大学医学部医学科卒業、同第二外科研修医
1987年	東京大学第二外科助手
1989－91年	米国ミシガン大学外科留学
1995年－	癌研究会附属病院 外科医員（2001年 同医長）
2001年－	東京大学肝胆膵外科 助教授
2007年－	東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科 教授
2017年－	国立研究開発法人国立国際医療研究センター 理事長（現在に至る）
2012－16年	日本外科学会理事長
2018年	第118回日本外科学会会頭
2015－17年	A-PHPBA President
2020－22年	IHPBA President



米国における Surgeon-Scientist の現状



南カリフォルニア大学外科

伊藤 史人
Fumito Ito, MD, PhD, FACS

私と ACS とのつながりは Faculty Research Fellowship を受賞した 9 年前の 2014 年にさかのぼります。2011 年にアメリカで外科医となってから様々な助成機関に科学研究費を申請し続け、20 回目にして初めて採択されたので、“It is my pleasure to inform you-” から始まるメールの添付書類を開けた時は本当に嬉しかったことを今でも昨日のここのように覚えています。Clinical Congress には 2018 年からはほぼ毎年参加していますが、2020、2021 年はコロナ禍でオンライン開催となったために、残念ながら他施設の外科医と交流する機会が限られました。2 年ぶりの現地開催（サンディエゴ）となった昨年はアメリカで外科研修を共にした同僚やお世話になった恩師の方々に再会できただけでなく、ACS 日本支部のレセプションにも参加させて頂き、普段お目に掛かることのできない日本を牽引されている先生方とお会いすることができ、貴重な時間を過ごせましたことを大変感謝致しております。

私は現在、南カリフォルニア大学病院及びノリス総合癌センター、並びに Los Angeles County + University of Southern California (LAC+USC) メディカルセンターで腫瘍外科医として働いております。1999 年から始めた腫瘍免疫学／癌免疫療法の研究を今も継続しており、主任研究者として癌センター内に研究室を構えています。つい最近までは我々の研究室のプロジェクトのみに集中していたのですが、2021 年に南カリフォルニア大学に異動してからは、米国立癌研究所（NCI: National Cancer

Institute）癌センター支援助成金に支えられた癌研究に関するプログラムの中の 1 つである Translational and Clinical Sciences プログラム の共同リーダーとして、基礎から臨床への橋渡し研究の手伝いをしています。このプログラムには約 70 名の主任研究者が所属しており、革新的な癌治療法とバイオマーカー開発を目標に活動しています。

日本では基礎系の大学院博士課程入学者に占める医師免許取得者の割合が低下し、研究に携わる外科医も減っていると聞きました。米国における外科医－科学者（Surgeon-Scientist）の現状は、最近の報告（Dembrowski *et al.*, *J Am Coll Surg* 2021）によると意外にも国立衛生研究所（NIH: National Institute of Health）から助成を受けて研究をする外科医の割合は、依然として少ないものの 2010 年の 0.5% から 2020 年には 0.7% に増加していることがわかりました。これにはいくつかの要因が考えられると思いますが、4 年制大学、医学校在籍時、臨床研修期間中、臨床研修終了後の各段

階で研究を補助する科学研究費の種類が多いことが関係しているかもしれません。その中には私も恩恵を受けた、基礎研究・橋渡し研究をする若い医師－科学者（Physician-Scientist）に特化した K08 グラントがあり、5 年間は勤務時間の 50 – 75% を研究に費やすことができるよう給与サポートと年間 3 – 5 万ドルの研究費が受けられます。さらに昨年 NCI は臨床研修が終了してから 3 年以内の若手外科医科学者のみが申請できるプログラム（Early-stage Surgeon Scientist Program）を発足し、研究に興味がある外科医を積極的にサポートする体制を整えようとしているようです。とはいえ K08 にサポートされた 5 年が過ぎれば他の研究者（PhD）と科学研究費を競い合うことになるので外科臨床と研究の二刀流を維持するのは大変です。最近では双方の時間を確保しながら、最新の専門的な知識を習得し続けることの難しさを日々痛感しています。

最後に、私の研究は多くの優秀な日本人留学生（ポスドク）に支えられ

ており、殆どが帰国後も大学でスタッフになり研究を継続しています。そのうちの数名は外科医－科学者として外科臨床と研究を続けており、非常に嬉しく思います。免疫学分野の日本の研究レベルは国際的に高く、共同研究をさせて頂いている日本の大学、研究所、ベンチャー・バイオテック企業には大変感謝致しております。また、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）は日米連携を推進しているようで、米国側研究者を 1 名加えることが条件とされた令和 4 年度「ムーンショット型研究開発事業」において、喜ばしいことに私が米国側研究者として参加したプロジェクトが採択されました。今後も教育、共同研究を通じて国際交流に貢献したいと思っており、ACS 日本支部を通じて日本の腫瘍外科領域でご活躍されておられる先生方と情報交換できることを楽しみに致しております。この度はこのような投稿機会を与えて頂いた長谷川潔先生に心から御礼申し上げます。

略 歴

1995	滋賀医科大学卒業
1995 – 1999	外科研修医、滋賀医科大学病院、京都第一赤十字病院
2000 – 2003	Research Fellow (Tumor Immunology), University of Michigan, Ann Arbor, MI
2004	滋賀医科大学大学院卒業（腫瘍免疫学）
2003 – 2005	Intern and Junior Resident in Surgery, University of Washington, Seattle, WA
2005 – 2007	Senior Resident in Surgery, University of Wisconsin, Madison, WI
2007 – 2008	Chief Resident in Surgery, University of Wisconsin, Madison, WI
2008 – 2010	Surgical Oncology Fellow, Roswell Park Comprehensive Cancer Center, Buffalo, NY
2011 – 2015	Assistant Professor of Surgery, University of Michigan, Ann Arbor, MI
2015 – 2017	Assistant Professor, Roswell Park Comprehensive Cancer Center, Buffalo, NY
2017 – 2021	Associate Professor of Surgery, State University of New York at Buffalo, Buffalo, NY
2017 – 2021	Associate Professor, Roswell Park Comprehensive Cancer Center, Buffalo, NY
2021 – present	Associate Professor of Surgery, Keck School of Medicine, University of Southern California, Los Angeles, CA
2021 – present	Co-leader, Translational and Clinical Sciences Program, Norris Comprehensive Cancer Center, Los Angeles, CA

Medtronic

Medtronic Japan Digital

多彩なコンテンツへシンプルアクセスいただけます

詳細はこちら



© 2022 Medtronic.
Medtronic 及び Medtronic ロゴマークは、Medtronic の商標です。
SI-A683





筑波大学消化器外科

高橋 一広

Kazuhiro Takahashi, MD, PhD, FACS

この度、新しくACSのfellowになりました高橋一広と申します。今回、FACSの認定を受けたことは、私が幼い頃から抱いてきたアメリカ社会の一員になるという夢が、ついに叶ったことであり、大変光栄に思います。私は正式にFACSを知ったのは、恥ずかしながらも、アメリカ留学の準備として推薦状を集めていた2012年のことでした。この時、FACSを持っている日本人医師から推薦状を頂けたことに、特別な意味を感じ、FACSを意識することになりました。さらに、留学中に指導してくださった先生方皆がFACSを持っており、FACSは言わば「アメリカ外科医の証」であり、これを持たなければアメリカで外科医の仲間入りはできないように直感的に感じていました。私は2年間半をミシガン州デトロイトで臨床研修を受けましたが、私がアメリカそしてFACSに対して特別な思いを持つようになった経緯を、私の歴史とともに述べてさせていただきます。

私は、父の研究留学に帯同し、小学2、3年生をマイアミで過ごしました。当時のマイアミ(1985～1986年)は、今と変わらぬ美しいビーチを持つ景観に加え、“マイアミ・バイス”に代表されるような、麻薬と銃が蔓延り、夜のネオンが怪しく煌めく危険な町でした。私は滞在した2年間を、日本人学校に通わず、現地のlocal schoolに通学しました。渡米した当初は、全く英語を話せなかったのですが、当時のアメリカ人達は、私を外国人ではなく、仲間として受け入れてくれました。2年間を現地の子供達と変わらぬ教育を受け、その間、多くの友達もでき、今にもつながる友人にも恵まれました。私は子供心にも、アメリカ社会の懐の広さを感じ、この時の経験は、英

語力のみならず、私のその後の人格形成にも大きく影響を与えることになりました。滞在期間が終わり、家族で帰国する飛行機の中で、「いつか自分の力でアメリカに帰って、アメリカ人たちと一緒に働く」と誓ったことを今でもはっきりと覚えています。

その後、時間が経過し、医学部を卒業後、秋田県で初期外科研修行いました。外科研修の中でもとりわけ、肝臓外科の術前評価法とその手技に魅了され、肝臓外科に意識を置いた研修を行いました。その後、筑波大学消化器外科に入局し、肝臓外科の研鑽を積み、さらに深く肝臓を学ぶために、大学院で肝再生と肝線維化を中心とした基礎研究に取り組みました。研究生活を送る中、肝臓外科を理解するには、究極的な肝臓手術である肝移植も理解する必要があるとの考えに辿り着き、2014年から2016年までの2年間、デトロイトのHenry Ford Hospital 移植外科で腹部臓器移植フェローシップでの研修を受けました。この時、私はPGY11年でしたが、日本国内で移植の修練を受ける機会がなかったため、移植知識ゼロの状態でのスタートとなりました。ECFMGを取ったとはいえ、決して英語がうまく話せるわけでもなく、アメリカ医療の基本的知識もない私に対して、Henry Fordの指導医やコメディカルたちは、息子のように大切にしてくれ、2年間で一人前の移植外科医に育ててくれました。私は指導医とコメディカルに対して大変な感謝とともに、アメリカ社会の寛容さを大人になって改めて認識することができました。アメリカの移植フェローシップはわずか2年でしたが、帰国した今でもHenry Ford Transplant Family

として大切にしてもらい、さらにFACSの認定を受けたことで、移植外科だけでなく、General Surgeryの先生方とも再度つながることができました。

私が感じるFACSのメリットを下記に挙げます。第一に、アメリカで活躍している日本人外科医と繋がるができることだと考えます。共に同じく日本の医学部を卒業してから、他方の先生方は途方もない努力と忍耐を続けて、現在アメリカでのpositionを獲得している。私には、とても実現できなかったことをやり遂げられています。また、大規模な研究に取り組まれていることも多く、成果も着実に出しておられる。日本では出会うことの少ない、このような優秀な先生方と繋がることは、とても大きな刺激になります。第二に、しっかりと“形”があるため、アメリカ人医師と恒久的な繋がりになることだと思います。知り合ったアメリカ人医師達たちとはSNSで繋がっているとはいえ、“形”としての共通認識や会う機会がなければ次第に疎遠になってしまいます。私がFACSを認定されて、元上司達からのたくさんの祝福をもらい、ある先生は息子のように喜んでくれ、ある先生は自身のアメリカ国内での外科教育活動を紹介してくれたり、改めて同じ仲間になったことを感じる事ができました。

た。第三に、多くの若い日本人医師や医学生はアメリカに少なからず興味を持っていますが、地域、科によってはどう繋がればいいのかわからず、アメリカ留学を実現することが難しい状況があります。そのような若い医師、学生達に、専門分野に制限されることなく、FACSを通してつながるアメリカ人外科医やアメリカで活躍する日本人外科医を紹介することができ、アメリカを現実なものとして繋いであげることができます。特に、私の地域ではFACSを認定された外科医が少なく、私のこの地域での役割は大きなものであると感じています。

以上、私のアメリカとFACSに対する思いについて書かせていただきました。コロナ禍でUSMLEの形態も変わり、またアメリカ社会のIMGに対する受け入れが厳しくなっていると感じています。それでもアメリカを目指して強い意志を持って日々努力し、これからアメリカに向かおうとしている若い先生方が私の身近にも何人もいます。将来的にはこのような先生方とこの地域でFACSを増やし、国を超えた価値観を共有できる外科医を増やしていければと思っています。また、アメリカ医療の光と影を実際に経験した立場として、日本医療(特に移植分野)の変革、発展に貢献できればと思っています。

略歴

2003年3月
2013年3月東北大学医学部 卒業
筑波大学大学院人間総合科学研究科 修士

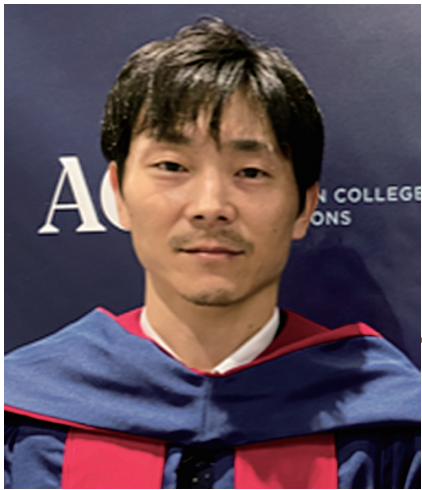
2003年5月1日～2007年3月31日 秋田県厚生連平鹿総合病院 外科 医員(研修医)
2007年4月1日～2009年3月31日 筑波大学附属病院医員(研修医)
2013年5月1日～2014年6月30日 ひたちなか総合病院外科 医員
2014年7月1日～2016年9月30日 Henry Ford Hospital, Michigan USA, Transplant and Hepatobiliary Surgery, Clinical fellow
2016年10月1日～2018年5月31日 筑波大学附属病院 病院講師
2018年6月1日～現在 筑波大学医学医療系消化器外科 講師

Better Health, Brighter Future

タケダは、世界中の人々の健康と、輝かしい未来に貢献するために、グローバルな研究開発型のバイオ医薬品企業として、革新的な医薬品やワクチンを創出し続けます。

1781年の創業以来、受け継がれてきた価値観を大切に、常に患者さんに寄り添い、人々と信頼関係を築き、社会的評価を向上させ、事業を発展させることを日々の行動指針としています。

武田薬品工業株式会社
www.takeda.com/jp



新 ACS Fellow になりました



長崎大学大学院 移植・消化器外科

松島 肇

Hajime Matsushima, MD, PhD, FACS

この度、2022年10月にACS fellowに加えていただきまして、國土先生、長谷川先生、ご推薦いただきました先生方に心より感謝申し上げます。コロナ禍で海外どころか県外への移動も長らく制限されておりましたので久々の米国への出張でこのような名誉あるFACSの授与式に現地参加することができ大変良い思い出となりました。これまでFACSを取得された先輩方から授与式の雰囲気など聞いてはありましたが、実際初めて授与式に参加し会場の規模の大きさ、人の多さ、また雰囲気圧迫されました。赤と紺を基調としたマントは重厚感漂い、身にまとうと、どこことなく湧いてくる達成感と感動に包まれました。

私は平成19年に信州大学医学部を卒業し、2年間の初期研修ののち、平成21年に長崎大学移植・消化器外科(旧第二外科)に入局いたしました。関連病院での経験を経て、平成28年より福岡にある国立病院機構九州医療センターに出向する機会をいただき、肝胆膵外科医として歩みははじめました。長崎大学では肝移植、膵臓移植を行っておりましたので、私も移植医療に興味を持つようになり、平成30年6月から約2年間、米国オハイオ州にあるクリーブランドクリニック移植

外科に研究員として留学する機会をいただきました。クリーブランドクリニックは近年全米1位の肝移植年間件数を誇っており、また米国では施設が限られている生体肝移植実施施設でもあります。さらには、小腸・多臓器移植においても世界的に有名であります。私はECFMG取得していませんでしたので、レシピエントの手術にscrub inすることができず見学のみでしたが、脳死ドナーの手術には術者や助手として参加することができ、多くのことを学ばせていただきました。また研究としてはマウス小腸移植モデルを用いた移植免疫に関する基礎研究を行っていました。マウスを使った移植モデルは非常に手技難易度が高く、毎日が失敗の繰り返しであり、週末もただひたすら研究室で手技習得に努めていた思い出があります。留学する前と後で米国の外科医に対する印象が大きく変わりました。それは米国の外科医は私が想像していた以上に仕事熱心であるということです。私が留学中に接する機会があった移植外科医のほとんどが体力的にも精神的にも非常に逞しく、また勤勉でありました。米国の外科医療が世界の最先端を走り続けていることが納得できました。

米国留学経験を経て、日本での移植医療にもう少し深く関わってみたいと思うようになり、帰国後はすぐに藤田医科大学臓器移植科で膵臓移植の手術、周術期管理について学ばせていただきました。そして令和2年7月から長崎大学に帰学し、肝移植・膵臓移植医療に従事しながら現在長崎大学での小腸移植開始に向けて準備を行っております。米国で学んだことが日本での医療発展に少しでも貢献できるよう頑張りたいと思っております。

ACS2022年サンディエゴで行われたJapan chapter cocktail receptionでは多くの米国で活躍する日本人の

先生方や過去に米国での留学経験のある先生方にお会いし、貴重なお話を聞くことができました。中には私のようにマウス臓器移植モデルを用いた基礎研究を行なっている先生や移植外科医として米国で臨床経験を積んだ先生もおられ、非常に良い刺激となりました。このような情報交換の場は大変貴重であり、今後とも積極的に参加していきたいと思いました。

最後になりますが、この度FACSに加えていただき大変光栄に存じます。まだまだ未熟者ではありますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成19年3月	信州大学医学部卒業
平成19年4月	長崎大学病院 研修医
平成21年4月	長崎大学病院 移植・消化器外科 入局
平成22年4月	長崎労災病院 外科
平成23年4月	国立病院機構佐賀病院 外科
平成24年4月	長崎大学病院 移植・消化器外科 医員
平成27年4月	長崎労災病院 外科副部長
平成28年9月	国立病院機構九州医療センター肝胆膵外科
平成30年1月	長崎大学病院 移植・消化器外科 助教
平成30年4月	長崎十善会病院 外科
平成30年6月	クリーブランドクリニック移植外科 研究員
令和02年4月	藤田医科大学 移植・再生医学 研究員
令和02年7月	長崎大学病院 移植・消化器外科 助教(現職)



患者様の想いを見つめて、
薬は生まれる。

ヒューマン・ヘルスケア企業 エーザイ

エーザイはWHOのリンパ系フィラリア病制圧活動を支援しています。



2022 Japan Exchange Fellow として 第108回ACS会議への参加



慶應義塾大学医学部 外科学教室

田中 真之

Masayuki Tanaka, MD, PhD

I. Japan Exchange Fellowに選出

日本外科学会の国際委員会より、「American College of Surgeons 出席旅費給付」のお知らせのメールを読んだ時、「申請したい!」という強い衝動に駆られました。ACS Clinical Congressに参加できると共に施設見学ができるという国際活動が、まさに私のやりたかったことであったからです。私は10年間日本で臨床に従事した後に、ドイツのハイデルベルク大学外科の脾臓外科部門に2017年4月から2年間留学し、臨床および研究を行いました。脾臓外科の世界的権威であるProf. Thilo Hackertから直接指導を受け、研究に関してはシステムチックレビューを中心に行い、多くの業績を残すことができました。この2年間で視野が広がり、世界へ発信することの重要性をしっかりと認識することができました。そのモチベーションがありましたので2020 Japan Exchange Fellowを熱望したところ、選出していただきました。しかし、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で、例年渡米していたJapan Exchange Fellowの状況は一変致しました。我が国においても緊急事態宣言発出などあり、また、世界的な流行は継続しており収束の目処はなかなか立たず、2年間渡米することはできませんでした。しかし、Japan Exchange Fellowを諦めることはできず、国際委員会の方々に適宜ご相談させていただき、2022 Japan Exchange

FellowとしてACS Clinical Congressの参加および施設見学のご許可をいただきました。2年越しに実現したことになったわけです。

II. 第108回ACS Clinical Congressへの参加

第108回ACS Clinical Congressは2022年10月16日から20日までの5日間、米国California州San DiegoにあるConvention Centerで開催され、レセプションなどは近くのGrand Hyattホテルで行われており、学会の規模に圧倒されました。学会ではレジデントやフェローのための外科育成プログラムなどの教育的かつ実践的なセッションが多く、私は肝胆脾外科領域のセッションを中心に聴講しました。また、International Guest Scholarships exchange fellowとしてACS主催の多くのReceptionに参加させて頂きました。私以外に各国から様々なプログラムでInternational Guest Scholarが参加されており、彼らとReceptionで多くの時間を共有することができ、彼らの母国の医療の現状を知ると共に、意欲の高さや行動力に大変感銘を受けました。さらに、Japan Chapter Cocktail Receptionにも参加させて頂きました。そこでは、現在米国でご活躍されている先生方もご参加されており、直接お話しすることができ、まさに国際活動に従事されている先生方の姿に大変刺激を受けまし

た。今回私のメンターとして対応して下さったColorado University Surgical Oncology division chiefのProf. Marco Del Chiaroもご招待されており、学会の直後に施設見学に伺うことになっておりましたので、あらかじめご挨拶することができました。COVID-19により全米で見学中止となっている施設がある中、Colorado Universityでは厳しい制限の元、施設見学を実現してくださいました。

III. おわりに

このような名誉ある大変貴重な機会を与えて頂きました湊谷謙司教授をはじめとする日本外科学会国際委員会の方々に誌面をお借りいたしまして深く感謝申し上げます。今回の学会、Receptionを通じて国際的な繋がりを意識する絶好の機会に恵まれ、今後の外科医人生において重要なピースになったと確信しております。



ACS会議にて
ACS International Relations Committee chairmanのProf. Nader Hannaと共に

略 歴

2001年4月	慶應義塾大学医学部入学
2007年3月	慶應義塾大学医学部卒業
2007年4月	東京歯科大学市川総合病院 臨床研修医
2009年4月	慶應義塾大学 一般・消化器外科 入局
2014年4月	がん研有明病院 肝胆脾外科 医員
2017年4月	ハイデルベルク大学病院 一般・消化器・移植外科 研究員
2019年4月	川崎市立川崎病院 外科 医長
2020年4月	慶應義塾大学 一般・消化器外科 助教



アビテン[®]に含まれるコラーゲンが血小板を活性化させ、止血カスケードを促進させます。

コラーゲン使用吸収性局所止血材
BD アビテン[™]

承認番号: 30300BZX00066000
クラス分類: 高度管理医療機器(クラスIV)
一般的名称: コラーゲン使用吸収性局所止血材
償還区分: 機械的コラーゲン

製品に関するお問い合わせは
こちらから

・事前に必ず添付文書を読み、本製品の使用目的、禁忌・禁止、使用上の注意等を守り、使用方法に従って正しくご使用ください。
・本製品の添付文書は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)の医薬品医療機器情報提供ホームページでも閲覧できます。

製造販売元
株式会社メディコン
〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地1-13-22
カスタマーサービス Medicon-web@bd.com

crbard.jp
BD, the BD Logo, Avitene are trademarks of Becton, Dickinson and Company or its affiliates. ©2023 BD. All rights reserved.




植物デンプン由来の吸収性局所止血材が
外科手術をサポートします。

デンプン由来吸収性局所止血材
バード アリスタ[®] AH

承認番号: 22600BZX00455000
クラス分類: 高度管理医療機器(クラスIV)
一般的名称: 吸収性局所止血材
償還区分: デンプン由来吸収性局所止血材
(本体アプリケーションのみ)

製品に関するお問い合わせは
こちらから

・事前に必ず添付文書を読み、本製品の使用目的、禁忌・禁止、使用上の注意等を守り、使用方法に従って正しくご使用ください。
・本製品の添付文書は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)の医薬品医療機器情報提供ホームページでも閲覧できます。

製造販売元
株式会社メディコン
〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地1-13-22
カスタマーサービス Medicon-web@bd.com

crbard.jp
BD, the BD Logo, Arista are trademarks of Becton, Dickinson and Company or its affiliates. ©2023 BD. All rights reserved.





New Fellows

新入会員名簿

Nobuhisa Akamatsu	赤松 延久 (東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科)
Shiki Fujino	藤野 志季 (大阪国際がんセンター研究所がん医療創生部)
Kenji Fujiyoshi	藤吉 健司 (久留米大学消化器外科)
Takanobu Hara	原 貴信 (長崎大学移植・消化器外科)
Yoshikura Haraguchi	原口 義座 (京葉病院外科)
Yoshiro Itatani	板谷 喜朗 (京都大学消化管外科)
Yukihiro Kanda	神田 幸洋 (International SOS)
Shogo Kobayashi	小林 省吾 (大阪大学消化器外科)
Masayuki Kojima	小島 正之 (藤田医科大学総合消化器外科)
Hajime Matsushima	松島 肇 (長崎大学移植・消化器外科)
Koichiro Mori	森 浩一郎 (もりえい病院外科)
Satoshi Nagasaka	長阪 智 (国立国際医療研究センター呼吸器外科)

Shigeki Nakagawa	中川 茂樹 (熊本大学消化器外科)
Atsushi Osoegawa	小副川 敦 (大分大学呼吸器・乳腺外科)
Akiko Serizawa	芹澤 朗子 (藤田医科大学総合消化器外科)
Kazumisu Suzuki	鈴木 和光 (藤田医科大学総合消化器外科)
Yosuke Tajima	田島 陽介 (新潟大学消化器・一般外科)
Takeshi Takahara	高原 武志 (藤田医科大学総合消化器外科)
Kazuhiro Takahashi	高橋 一広 (筑波大学消化器外科)
Nobuyuki Takemura	竹村 信行 (国立国際医療研究センター肝胆膵外科)
Toshikatsu Tsuji	辻 敏克 (金沢大学消化管外科)
Yuichiro Uchida	内田 雄一郎 (藤田医科大学総合消化器外科)
Kazuhiko Yamada	山田 和彦 (国立国際医療研究センター食道胃外科)

事務局便り

COVID-19 感染症の世界的な大流行はいまだ解消されたとはいえませんが、ワクチン接種の普及で重症者が少ないからか、あるいは各種対策が整備されてきたからなのか、医療現場への圧迫は以前ほどではなくなっているようです。2022 年初あたりから各国あるいは日本も諸々の規制は段階的に緩和されており、ACS 日本支部も少しずつ活動を再開してきました。

例年、日本外科学会学術集会中に開催される日本支部会は外科学会そのものがハイブリッド開催となったため、残念ながら支部会はオンライン開催となりましたが、ACS President の Julie A. Freischlag 先生が 20 分にもわたるビデオメッセージを寄せていただくなど充実した内容でした。本年の日本支部例会は COVID-19 感染の状況次第ですが、現地開催を目指しており、現 President の E. Christopher Ellison 先生も来日予定とのことです。会員の皆様におかれましては各施設の規定があると思いますが、可能な限り東京高輪にご参集いただければ幸いです。

また、2022 年の新フェローは 23 名と 4 年ぶりに 20 名を超えました。ACS 本会中に開催する恒例のパーティーをどうするか悩んでいましたが、新フェロー申請者にインタビューしますと、施設の制限がなければ、基本的に本会には現地参加したいという声がほとんどでしたので、思い切って 3 年ぶりにパーティー (Manchester Grand Hyatt San Diego にて) を開くことにしました。本会の方が発表や座長は原則現地参加と“強気?”の姿勢だったのもパーティー開催の方向へ後押ししてくれました。実際やってみると、事前アンケートでは 30 名前後の出席予定 (例年の半数くらい) だったのが、当日は約 50 名 (米国からの参加、海外ゲストも含む) が参加と非常に盛況でした。コロナで内向き志向と言われていましたが、海外への関心と対面交流の欲求が高まっているのだろうと感じております。

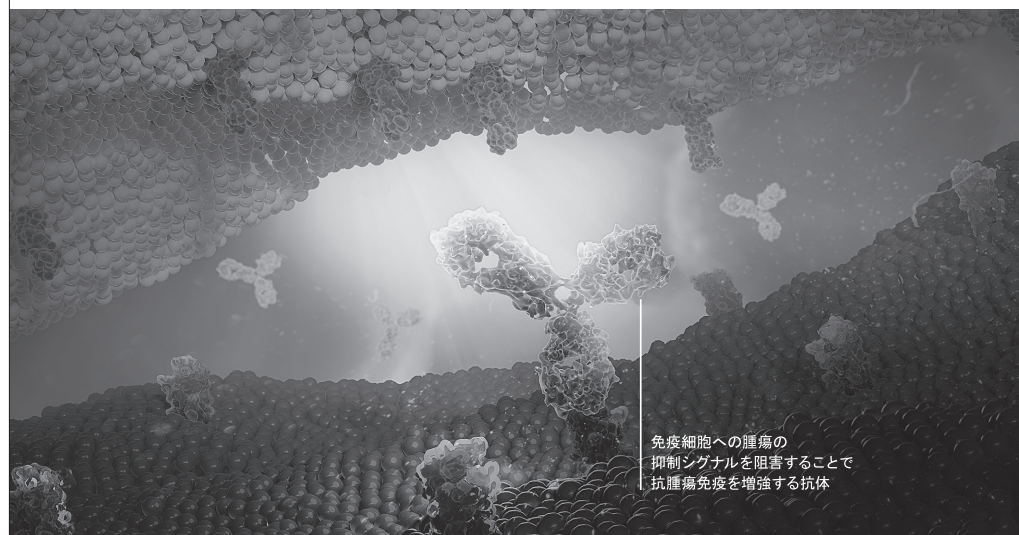
今年の ACS 本会は 10 月 22 日～10 月 26 日、ボストンで開催予定です。当然現地開催と考え、恒例のパーティーを準備いたします。本年新たに FACS を取得された先生方、ここ 3 年のうちに取得されたが、コロナ禍で現地に行けなかった先生方、ぜひこのパーティーでお会いしましょう。

ACS 日本支部事務局 長谷川 潔

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学肝胆膵外科医局内
TEL.03-3815-5411 FAX.03-5684-3989
e-mail:acsjpn-admin@umin.ac.jp

What science can do

AstraZeneca



アストラゼネカ株式会社

〒530-0011 大阪市北区大深町3番1号 グランフロント大阪タワーB
www.astrazeneca.co.jp/

ESS Website
ETHICON Surgical Solution



これまでも これからも “使いやすい” の 追求を

POINT 1
診療科別コンテンツページ
で使いやすい

POINT 2
手技とコンテンツタイプで
動画を簡単検索

POINT 3
マイページでお気に入り
動画を一元管理

POINT 4
イベントの申込み・管理が
より快適に

新しくなった ESS Website ! <https://www.ess.jkkpro.jp>

POINT 5
ESS App

ESS Website の情報をよりお手軽に、アクセスいただけます



ETHICON
Johnson & Johnson Medical